

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：38001

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00740

研究課題名(和文) 小規模島嶼群における文化適応と潜在性の考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Studies of the Cultural Adaptation and Potential in the Small Islands

研究代表者

新里 貴之 (SHINZATO, Takayuki)

沖縄国際大学・総合文化学部・准教授

研究者番号：40325759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：ほとんど先史的には空白地域であったトカラ列島について研究を実施した。先史土器からみると、その大半は奄美・沖縄系統の土器の分布になること、時代が新しくなるにつれて、九州系統になっていくこと、などが析出された。また、約5千年前には佐賀県腰岳産黒曜石が中之島にもたらされていること、約2千年前には、九州北部・中部・南部、大隅諸島、奄美諸島の土器が中之島に集中していること、約1千年前には、九州系統の土師器圏になるが、供膳具が発達しないところが、奄美群島喜界島の様相に類似していることが判明した。

また、平島に1894年に漂着した無人船由来の陶磁器「ピーピーどんぶり」のセット関係や流通範囲が判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的に空白部が多い小規模島嶼トカラ列島の先史時代の流れを、主に先史土器の分布を用いることによって把握することができ、またその大半が奄美・沖縄系統であることが理解された。これまで見向きもされなかった当該地域の弥生時代については、九州から奄美にいたる各系統の土器が中之島に集まっており、そのような状況はこれまで想定もされていなかった。平安時代には土師器・越州窯系青磁碗がセットで確認されるが、供膳具が少ないこと、九州以南では博多・長崎・喜界島でしか確認されていなかった越州窯系青磁水注が出土すること等、トカラ列島は小規模島嶼で片付けられない歴史的要衝であったことが示された。

研究成果の概要(英文)： There is not much research into the prehistory in Tokara Archipelago. Studies of prehistoric pottery have shown that the majority of the area was covered by the Amami-Okinawan style pottery. However, it can be seen that the pottery is gradually becoming Kyushu style. Other topics include: about 5000 years ago, obsidian was brought to Nakanoshima from Koshidake, Saga Prefecture; about 2000 years ago, many style pottery were gathered in Nakanoshima from northern, central and southern Kyushu, the Osumi Islands and the Amami Islands; and about 1000 years ago, the area became Kyushu-Hajiki style pottery area, but with few small dishes. This is similar to the situation on Kikai Island in the Amami Islands.

The combination and distribution area was also determined that 'pi-pi-donburi', Chinese ceramics derived from an unmanned ship that drifted ashore on Tairajima in 1894.

研究分野：考古学

キーワード：トカラ列島 小規模島嶼 先史土器 奄美・沖縄系統 中之島宮水流遺跡 宝島大池遺跡 晩清～民国 初期青花 平島無人漂着船(中国籍)

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの先史時代から原史時代のトカラ列島の考古学的研究は、網羅的研究がほとんどなく、生態的情報にも乏しいため、トカラ列島という小規模島嶼の文化適応の実態を把握することが極めて困難であった。

本研究では、悉皆的な全島調査により得られた先史土器という在地性の強い遺物を用いて、型式学的把握により文化的系統把握を行うことで、トカラ列島間の共通性、そしてその島嶼群域を超えた集団の移動を予測する。これを補強する材料として貝製品・石器類を取り扱い、物質文化の系統関係を補強する。また、遺跡から出土する動植物遺体の直接的な検討および骨の炭素・窒素安定同位体分析や土器残存脂質分析によって、資源の限定された島嶼環境における食性が明らかにすることが可能となる。

以上の総合的な出土遺物の分析から、高島や低島の文化環境と食生態が九州系統であるのか、南西諸島系統であるのか、あるいはトカラ列島の独自性が表れるのか、在地文化と外来文化の違いを明確にし、トカラ列島の先史時代から原史時代の在来文化の様態が、ひとつの面としてのエリアが設定可能であるのか、核となる地域の文化の折衝地点としての重複エリアであるのかを、物質文化現象として捉え直し、特定遺跡の発掘調査の層位的把握をもとに、島ごとの適応過程と変動の有無を明示することが可能となる。トカラ列島の特性が示されれば、これまで不明瞭であった南西諸島の空白地域における歴史の可視化が可能となる。また、トカラ列島のような小規模で、資源の乏しい島嶼環境で高島と低島の自然環境多様性の相互関係のなかで一体性のある先史人類の適応を実証できれば、その文化的特性・歴史性を「トカラ・モデルケース」として、小規模島嶼部における人類適応の文化多様性の実態として提示することができる可能性が高い。

2. 研究の目的

本研究は、小規模島嶼トカラ列島において、先史時代の集団が文化的にどのように適応したか、考古学分野を主眼として実態に迫るものである。トカラ列島は資源の少ない小規模な島嶼環境にあり(12島;総面積約101 km²)、地理的に火山性の高島とサンゴ礁性の低島で構成され、黒潮のあろう亜熱帯地域であり、生物学的にも悪石島と宝島間に渡瀬線という境界ラインを有する特殊な環境下にある。南西諸島でも地理的に南北の通過地点であるとともに、七島灘という交通の難所としても名高い。このような環境下において、各島に散在的に先史時代の遺跡が確認されてきた。本研究では、トカラ列島が独立した文化背景をもつのか、各島の相互関係でなりたっていたのか、あるいは隣接した島嶼群(大隅諸島・奄美諸島)との関係性において展開するものであるのか、全島踏査および発掘調査結果から得られた考古学的な資料よりその実態を把握し、トカラ列島地域という南西諸島の考古学的文化多様性とその潜在的持続可能性の一端を解明することを目的としている。

3. 研究の方法

- A) トカラ列島3島(中之島・悪石島・宝島)の発掘調査と
- B) 分布調査の継続および過去に調査・回収された遺物の悉皆調査を基本資料として、
- C) 調査で得られた遺物(土器・貝製品・石器)の型式学的研究によるトカラ集団の文化特性の把握、
- D) 動植物遺体および人骨、土器残存脂質の炭素・窒素安定同位体分析によって、小規模島嶼部としての食性の特性が表れるかを確認する。また、
- E) 動物考古学(主に陸産貝類遺体)による古環境復元によって、当時の居住環境を想定する。
- F) 国内でトカラ列島に主体的に分布する清朝磁器について、限定された物質文化流通の実態を把握する。

4. 研究成果

(1) 【先史時代・原史時代】

貝塚時代前2期(縄文時代中期)

2017年に実施したトカラ列島宝島大池遺跡の発掘調査の概要をまとめた(2018年度)。調査地点は、国立歴史民俗博物館の名称に従い、トレンチの掘削場所が異なるので、それぞれ掘削順に枝番を付した。A地点は3か所を調査し、A1トレンチでは、大型ヤコウガイ、シャコガ

イ集中出土。最下層より室川下層式土器が出土した。A 2 トレンチでは、大型ウミガメ、イノシシ、マガキガイ集中箇所が見られた。土器はなく、年代が不明であるが有孔貝刃が出土した。A 3 トレンチは開口部に石をまばらに配した炉跡 2 基が検出され、多量の炭化物ほか、貝類、魚類、ウミガメ、イノシシなど多数出土している。室川下層式土器も多数出土した。

B 地点は 2 箇所を調査し、B 1 トレンチは遺物がほとんど出土せず、成果はなかった。露出した石棺墓については、底石下位の掘削調査を実施し、単層構造であることを確認した。

土器は、貝塚時代前 2 期の室川下層式土器を主体とし、九州南部の縄文時代中期春日式土器？が少量伴う。石器は、チャート製の剥片石器少量と剥片多量に出土している。貝製品は、ヤコウガイの蓋を利用した螺蓋製敲打器が主体で、ほかに貝小玉・貝輪少量しているが、有孔貝刃[マスオガイ類：日本新記録種か]が特筆される。

陸生動物のうち脊椎動物はリュウキュウイノシシ主体であり（樋泉岳二分析）、陸産貝類は、タカラジママイマイ、オオシママイマイ、ヤマタニシ類、オキナワウスカワマイマイなどが確認された（黒住耐二分析）。海生動物のうち脊椎動物は、ウミガメ類、ブダイ類、ハタ科、ニザダイ科などサンゴ礁域の魚類が多い（樋泉岳二分析）。海産貝類はヤコウガイ、チョウセンサザエ、スイジガイ、クモガイ、ナガジャコ、シラクモガイ、カメノテ、タカラガイ類、アマオブネ、オオツタノハ、オオベッコウガサガイなどサンゴ礁域の貝類が多い（黒住耐二分析）。

以上より、トカラ列島南部における貝塚時代前 2 期（縄文時代中期）室川下層式段階にサンゴ礁環境成立が確認された意義は大きい。人為的な痕跡としては、A 2 トレンチにおけるウミガメのまとまった廃棄状況、イノシシ椎骨の関節状況があるにも関わらず、土器や炭化物などは出土しない状況は、居住域から離れた場所において、大型動物の解体か廃棄場所を示していると考えられた。土器、マスオガイ類の有孔貝刃、良質なチャート、イノシシなどは、島外から持込みによるものと判断された。放射性炭素年代測定（米田穰）、土器残存脂質分析（庄田慎矢）なども実施している。



写真 1 室川下層式・春日式？



写真 2 ウミガメ・イノシシ・海産貝類

貝塚時代前 2 期（縄文時代中期）・貝塚時代後期（弥生時代～平安時代）・グスク時代（平安時代末～鎌倉時代）

トカラ列島中之島宮水流遺跡第 2 ～ 4 次調査を実施した（2018・2019・2022年度）。

調査区は 2 × 2 m のトレンチを基本とし、これまで 1 ～ 4 トレンチを設定している。3 トレンチのみは拡張を継続しており、a～e 地点に区分している。

2 トレンチ（第 1 次調査）4 m²

神社敷地の北側入口部分であり、遺跡範囲の北限を確認する意図で設定したが、2 m の深さまでほとんど土砂の盛土となっており、本来は宮川に向かって傾斜する地形を平地化した可能性がある。弥生土器（？）が 1 点のみ出土した。

1 トレンチ（第 1 次調査）4 m²

神社敷地内で二の鳥居前の昭和 9 年建立の記念碑のある広場に設置した。遺構は確認されず、土層の堆積状況からみて、本来は宮川にむかって傾斜する斜面だったと想定される場所である。小破片が多いものの出土遺物量は多い地点であり、貝塚時代後 1 期（弥生時代中期～古墳時代初

頭)の各系統の弥生土器が出土する。主として九州南部・大隅諸島系の入来 式土器、山ノ口式土器、大隅諸島系の鳥ノ峯式土器、奄美諸島系の長浜金久第 宇宿港段階の資料であり、そのほかにも九州北部系須玖 式土器、九州中部系黒髪 式土器、九州南部成川式土器などが見られる。石器は頁岩製の磨製石鏃、小型片刃石斧などが出土する。母岩や剥片が大量に出土するため、同遺跡における石器製作が行われていると考えられる。また、凹石も少なくない。

表土にはグスク時代(中世)の陶磁器が包含されている。各層の出土土器の残存脂質分析を実施したところ、シカと思われる脂質が検出された(庄田ほか2021)。堅果類の子葉も確認されている(高宮広土分析)。

4 トレンチ(第2次調査) 4 m²

神社本殿前の小広場に設けたトレンチで、地形からも狭い平坦地に相当する。ここでは土坑やピットが数基確認され、南北方向に延びる平坦地に居住域があったことが想定された(写真3)。遺物は多くはなく、貝塚時代後1期(弥生時代中期～後期)に属する九州南部・大隅諸島・奄美諸島系の土器がほとんどで、磨製石鏃、凹石なども出土している。わずかに貝塚時代後2期(平安時代)の土師器甕も出土する。ピットや土坑中の埋土を半分と、各層の土壌をサンプリングし、フローテーション分析を行ったところ、貝塚時代後2期(平安時代)のピットよりイネらしき炭化物が検出された(高宮広土分析)。

3 トレンチ(第1～4次調査) 17.5 m²

宮水流遺跡調査で最も主力を置くトレンチであり、每次拡張して調査を行っている。巨礫に囲まれた平坦地で、地域住民の聞き取りからは、この広場でも過去には祭祀行為が行われていたという(2020年聞き取り)。最下層で貝塚時代前2期後半(縄文時代中期後葉)の隆帯文系神野B式・具志川B式土器のほか、佐賀県腰岳産黒曜石が数点出土し、炭化物の多く含まれる溝状遺構が確認された。また中之島には産しないチャート剥片も確認されている。中位層では、4トレンチ同様の貝塚時代後1期(弥生時代中期前半)の遺物が多数出土している。九州南部系統の入来 式土器が主体であり、わずかに奄美系沈線文脚台系土器が出土する。この時期の遺構は確認されていない。上位層では貝塚時代後2期(平安時代)の遺物が集中して出土している。土師器甕、坏、黒色土器(内黒)、須恵器甕、越州窯系青磁碗(大宰府分類 類)、軽石製品などが同層中で出土している。礫が並んで配置されたようにも見受けられる箇所があったが、性格はつかめていない。最も新しい遺構では、玉縁口縁白磁の出土する浅い土坑が確認された。また表採ではあるが、火を受けた越州窯系青磁水注(大宰府分類 類)破片が確認された。第3次調査では貝塚時代前2期(縄文時代中期後葉)の溝状遺構の土壌をサンプリングし、フローテーションを実施したが、わずかに堅果類が検出された(千田寛之分析)。

宮水流遺跡は、背後から水量豊富な宮川が流れ、前面はサンゴ礁に囲まれた海に向かう、比高10mほどの緩斜面上の小平坦地に、概して3期にわたって占地された遺跡である。

貝塚時代前2期(縄文時代中期後葉)の溝状遺構と隆帯文系土器の出土は、トカラ列島南部の宝島大池遺跡に続く前2期の遺跡の存在を示したものであり、隆帯文系の段階からトカラ列島北部域にまで南島系土器文化が展開していたことを明らかにした。また、この時期に既に佐賀県腰岳産黒曜石や原産地不明のチャートなどが持ち込まれており、当時から広範囲の交流があったことを示している。

貝塚時代後1期(弥生時代中期)には、九州南部の土器を主体として、九州北部・中部の土器も確認され、また、奄美沈線文脚台系の土器群も一定量確認される。同後1期でも弥生時代後期になると大隅諸島系の鳥ノ峯式土器と奄美沈線文脚台系の土器群が確認される。南島において、このように多様な系統の土器群が一遺跡から出土することはほとんどなく、貝塚時代後1期(弥生時代)における同遺跡の重要性が示された。おそらく当時の中之島が、九州北部と沖縄諸島を結ぶ弥生時代南島貝交易における要衝としての結節点であったか、この遺跡の集団が貝交易に積極的に関与していたことを示す証左であろう。頁岩の母岩や剥片が多数出土することから、現地で磨製石鏃を製作していたことも確認された。石器組成からは、堅果類や貝類の利用、小動物の狩猟などが想定される。漁撈活動なども当然考えられるものの、火山島であるため食料残渣としての動物遺体はほとんど出土していない。

貝塚時代後2期(平安時代)は、遺物の個体数が少なく、遺構も確認されていないため、生活の場があったのかは不明瞭である。同島の土師器をはじめとするその多様な種類の遺物群は、9～10世紀代の九州南部的(含・三島、大隅諸島)な組成を示しており、奄美・沖縄地域に展開するくびれ平底系土器文化とは明確に異なる。しかしながら、九州南部地域の状況と異なるのは、

土師器のうち、坏類の出土量が圧倒的に少ないことである。この遺物組成は中之島の南方に展開する、喜界島城久遺跡群の古代遺物群の様相と類似し、喜界島が同一文化の延長線上に位置する可能性がある（伊藤 2011〔初出は 2009〕、新里 2010）。ほかにも祭祀具として軽石製品が存在することが特筆される。軽石製品の発達する南九州地域でもこの時期の類例はあまりなく、南島ではほとんど類例のないこの製品は、火山島中之島特有の文化遺物である可能性もあるだろう。

小規模島である中之島のように古くから土器文化の定着のあった背景には、九州と南島間に飛び石状に位置する地理的位置、高山の深い森の豊富な植生と水源、遺跡前面に広がる海洋資源などといった食性の安定性があり、このことが各時期における遠隔地との活発な往来を可能にしたものと理解される。



写真3 貝塚時代前2・3期



写真4 貝塚時代後1期



写真5 貝塚時代後2期



写真6 グスク時代

【歴史時代】

1894（明治 27）年、トカラ列島平島において無人の中国船が漂着し、その内部に積載されていた約 1 万～2 万点の清朝青花（国内にはほとんど流通しない）が平島に保管され、やがてトカラ列島全域に流通していたことを明らかにしてきたが、その追跡調査を実施した。

清朝青花再確認のため、平島現地調査を実施した。ある民家に保管されていた双喜文青花碗完形品 1 点は、平成 29 年度の家屋のリニューアル工事の際に紛失していた。しかしながら、別の民家には散蓮華完形品が保管されており、資料化することができた。また、昭和後半～平成初頭に民俗調査を実施した下野敏見氏所蔵写真のうち、陶磁器類について各戸を訪問しながら聞き取り調査したところ、かつて保管していた民家を特定することができ、また、カニの造形文をもつ鉢、色絵も各戸に保管されていたことを確認した。さらに、島外在住の元平島住民宅に、漂着船由来の「シナ茶碗」としてセットで保管されていることを突き止めた。

奄美市で出土・採集されたとされる清朝青花喜碗を鹿児島県埋蔵文化財センターおよび今帰仁村歴史センターにて実査し、さらに沖縄久米島にも 1980 年代に記録されていることを突き止め、主要分布圏を超えたこれらの事例について発表した。

フィリピン国立博物館、フィリピン大学を訪問し、所蔵遺物の実査を行なった。フィリピン大学では、ヘンリー＝ベイヤーのコレクションの一部を調査することができ、トカラ列島平島において確認される清朝磁器（中国漂着船由来）と同製品を確認することができた。これにより本来東南アジア向け輸出される陶磁器である証拠の一つを確認したことになる。

また、中之島では平成 29 年に神社の本殿を取り壊し、拝殿を改装して一殿化したことを確認したが、その際に宋代・明代・清代白磁・青磁・青花、肥前染付、瀬戸産（？）施釉陶器などの完形品が廃棄されていたため、これらを区長に断って拝借し、資料化、発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計51件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 10
2. 論文標題 鹿児島国際大学地域総合研究所所蔵の琉球古瓦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 廣友会誌	6. 最初と最後の頁 139-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 9
2. 論文標題 トカラ列島・中之島宮水流遺跡第1～3次発掘調査概要	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奄美考古	6. 最初と最後の頁 1-10頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 庄田慎矢・新里貴之・鈴木美穂・高宮広土・タルボット=ヘレン・クレイグ=オリヴァー	4. 巻 83
2. 論文標題 土器残存脂質による貝塚文化北限地域における動植物資源利用の復元	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文化財科学	6. 最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinzato, Takayuki.	4. 巻 62
2. 論文標題 Agricultural rituals held in inner caves of Okinoerabujima.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Occasional papers.	6. 最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 151
2. 論文標題 大山盛保と港川フィッシャー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 50
2. 論文標題 トカラ列島：考古学研究の86年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島考古	6. 最初と最後の頁 143-148頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 71
2. 論文標題 鹿児島県	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本考古学年報	6. 最初と最後の頁 209-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高宮広土・新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二	4. 巻 -
2. 論文標題 奄美大島龍郷町半川遺跡第3次調査 (試掘調査)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 令和元年度鹿児島県考古学会総会研究発表会要旨	6. 最初と最後の頁 21-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 土器からみた琉球列島の地域間関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究会「琉球列島への人と文化の移動」発表資料集	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 トカラ列島中之島・宮水流遺跡の発掘調査から：トカラ列島の弥生時代・平安時代を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第66回トカラ塾ライブトーク	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之・伊藤慎二	4. 巻 -
2. 論文標題 トカラ列島・臥蛇島の先史時代遺物	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『中山清美と奄美学：中山清美氏追悼論集』	6. 最初と最後の頁 466-477
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinzato, Takayuki	4. 巻 -
2. 論文標題 Discarded Ceramics which had been Stored in Ji-nushi Shrine, Nakano-shima Island, in the Tokoara Archipelago.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Tokara Islands	6. 最初と最後の頁 20-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 墓と葬制	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南島考古入門	6. 最初と最後の頁 96-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二	4. 巻 -
2. 論文標題 トカラ列島宝島大池遺跡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成30年度鹿児島県考古学会総会研究発表会要旨	6. 最初と最後の頁 31-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 南島出土ヒスイ製品の特質	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 縄文と沖縄：火焰型土器のシンボリズムとヒスイの道	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 先史琉球列島の葬墓制	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 平成30年度第2回(通算第9回)葬墓制からみた琉球史研究会資料集	6. 最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 -
2. 論文標題 琉球列島先史時代の重層石棺墓	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東南アジア考古学会2018年度大会	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takamiya, Hiroto. Shinzato, Takayuki.	4. 巻 19(1)
2. 論文標題 Evolution of social complexity during the Shellmidden Period, the Central Ryukyus (Amami and Okinawa Archipelagos), Japan: :Not simply simple, but not necessarily complex.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Journal of Island and Coastal Archaeology	6. 最初と最後の頁 172-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/15564894.2022.2043493	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之・小河原孝彦・宮島宏	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 南島先史時代のヒスイ製玉類と非ヒスイ製玉類	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会文化研究	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹中正巳・鐘ヶ江賢二・中村直子・新里貴之・大西智和・沖田純一郎	4. 巻 20
2. 論文標題 種子島小浜遺跡2004-2号墓発掘調査報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 42
2. 論文標題 トカラ列島・横当島調査追補	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南島考古	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 784
2. 論文標題 トカラ列島・宮水流遺跡	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新里貴之	4. 巻 48
2. 論文標題 「陶器皿類四束 但内貳ツ破損」奄美・沖縄のピーピーどんぶり	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 奄美大島調査報告書 地域研究シリーズ	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計55件 (うち招待講演 17件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 高宮広土・新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二
2. 発表標題 奄美大島龍郷町半川遺跡第3次調査 (試掘調査)
3. 学会等名 令和元年度鹿児島県考古学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 土器からみた琉球列島の地域間関係
3. 学会等名 研究会『琉球列島への人と文化の移動』
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 トカラ列島中之島・宮水流遺跡の発掘調査から：トカラ列島の弥生時代・平安時代を中心に
3. 学会等名 第66回トカラ塾ライブトーク
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 「テーラのピーピーどんぶり」とは何だったのか
3. 学会等名 第54回トカラ塾ライブトーク
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二
2. 発表標題 トカラ列島宝島大池遺跡
3. 学会等名 平成30年度鹿児島県考古学会研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 ヒスイの道から貝の道へ
3. 学会等名 縄文と沖縄：火焰型土器のシンボリズムとヒスイの道シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 先史琉球列島の葬墓制
3. 学会等名 平成30年度第2回（通算第9回）葬墓制からみた琉球史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 琉球列島先史時代の重層石棺墓について
3. 学会等名 東南アジア考古学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 トカラ列島 中之島地主神社2017年改修時廃棄資料
3. 学会等名 鹿児島大学国際島嶼教育研究センタートカラ列島および甑島列島総合調査報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 フェンサ城貝塚の調査
3. 学会等名 2022年度沖縄考古学会総会・研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 南島先史時代の石製玉類出現の背景
3. 学会等名 令和5年度(2023)九州考古学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新里貴之
2. 発表標題 奄美・沖縄のピーピーどんぶり
3. 学会等名 沖縄国際大学南島文化研究所・奄美市立奄美博物館 奄美調査報告講演会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	高宮 広土 (TAKAMIYA HIROTO) (40258752)	鹿児島大学・総合科学域共同学系・教授 (17701)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	黒住 耐二 (KUROZUMI TAIJI) (80250140)	千葉県立中央博物館・その他部局等・研究員（移行） (82503)	
研究分担者	樋泉 岳二 (TOIZUMI TAKEJI) (20237035)	明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員 (32682)	
研究分担者	米田 穰 (YONEDA MINORU) (30280712)	東京大学・総合研究博物館・教授 (12601)	
研究分担者	庄田 慎矢 (SYOUDA SHINYA) (50566940)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・室長 (84604)	
研究分担者	高橋 遼平 (TAKAHASHI RYOHEI) (40728052)	帝京科学大学・その他部局等・学芸員 (33501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関